

お茶の花とお茶の水女子大学

山西 貞 (お茶の水女子大学名誉教授)

お茶大の学章はお茶の花である。それでこの表題で一文を書かせて頂くことにした。

茶樹の花芽は夏から秋(六月〜十一月)にかけて次々と分化発育してゆくので、三カ月以上に亘って白い花を見ることが出来る。お茶大の理学部三号館の前に育てられている小さな茶樹にも、白い可愛い花をつけているのを去年十一月頃見ることができた。

茶樹はツバキ科の植物で常緑樹である。品種には小葉種 *Camellia sinensis* と大葉種 *Camellia assamica* がある。日本の緑茶は小葉種からつくられる。セイロン紅茶やインドのアッサム紅茶は大葉種からつくられている。大葉種は花も大きめである。

お茶の花は優雅なほのかな香りを漂わせる。この香りに誘われて、蜜蜂や蝶が飛んできて蜜を吸う。蜜蜂は朝に星を戴いて出で、夕べに月を背負っ



茶畑

て帰る勤勉な昆虫といわれる。蝶は終日、花から花へと羽も忙しく翔け回る。

こうして茶の花の花粉は蝶や蜂などの昆虫によって媒介され、実を結ぶ、虫媒花である。蝶や蜂は茶の花から発散されているほのかな佳香に惹き寄せられるのである。

俳人蕪村は「茶の花」と題し、詩を詠み、また、「茶の花や白にも黄にもおぼつかない」と俳句を残している。

お茶の水女子大学誕生の経緯

明治七年(一八七四年)、文部卿木戸孝充の通達によって、東京女子(高等)師範学校の設立が決定され、神田宮本町(お茶の水橋、聖橋に対する所)に明治八年八月、校舎が落成した。中村正直撰理(校長)により、十一月二九日皇后陛下(昭憲皇太后)の行啓のもとに開校式が行われ、明治三年に東京女子高等師範学校となった。大正十二年九月一日の関東大地震で大被害を受け、昭和七年(一九三二年)文京区大塚町の現在の地に移転した。太平洋戦争を経て、昭和二四年学制改革



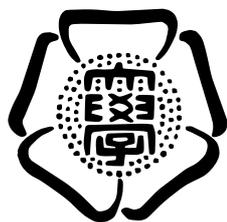
お茶の花

が行われ、東京女子高等師範学校は閉校となり、新制大学となった。大学の名称については、大塚女子大学、国立東京女子大学などの案が出されたが、教授会での投票や審議を経て、文部省の内意も聞き、最終的に「お茶の水女子大学」と決定された。

お茶の水女子大学の学章

東京女子高等師範学校時代の校章は桜花の五弁に曲玉まがたまを配したデザインであった。お茶の水女子大学になって、新しい学章をつくることとなり、それに関する企画委員会ができ、茶の花に大学と記したデザインが提出された。これについて学生投票が行われ、その結果をふまえ、教授会で最終決定されたのが現在用いられている学章である。

茶の花は純白で凛とした姿をして、優雅な香りをほのかに漂わしている。お茶の水女子大学の学生さん達を示す学章として、お茶の花は誠に適切であると思われる。



学章

余談 お茶特有の渋味の本体が、近年その生理機能が世界中で注目されている四種のカテキン類であることを見つけ、さらにそれらの化学構造を世界で初めて決定し、世界的に有名になられた辻村みちよ先生は、本学理科の卒業生(大正二年)である。先生は本学家政学部(現生活科学部)の初代学部長も務められた。